

## Japanese mythology in space and time—The Izumo part

ISAKA Seishi

Keywords: Japanese mythology, Izumo, Susanoo, Ookuninushi

### Abstract

In this paper, I examine stories of Izumo mythology in the *Kojiki* to place them at intersectional points of space and time, and to closely analyze their significance.

The first story concerns Susanoo, who was banished from Heaven and then descended into the depths of Izumo Province. There, he saved Lady Kushinada by killing a mythical dragon Yamatano-Orochi and then pulled out an iron sword from Orochi's tail. Susanoo presented this as so-called Kusanagi sword to Goddess Amaterasu. —The Kusanagi sword symbolizes the emergence of iron culture after bronze culture in Izumo Province. —Susanoo married Lady Kushinada and constructed a palace, located near the center of Izumo Province.

The second story concerns Ookuninushi, who wanted to establish the Izumo State. In Inaba Province he saved a hare crying with pain and married Lady Yakami. Consequently, he was envied and killed by his brothers, but he came back to life and overcame with the help of Susanoo. Ookuninushi was able to found Izumo State with the help of Oomononushi, who has sacred status on Mt. Miwa in Yamato as an ancestor of the Miwa clan. After Izumo State was founded, the Goddess Amaterasu demanded from Ookuninushi the inheritance right of the Izumo State. He accepted the demand on the condition of the construction of a palace, which is now called the Izumo Shrine. This mythical story conveys that Izumo State was incorporated into the imperial government of Yamato (Japan).

# 日本神話の空間と時間——出雲篇

伊坂青司

## はじめに

神話は史実に基づかない空想（ファンタジー）であろうか、あるいは何らかの史実が投影されているのであるか。神話がまったくの作り話であれば、そもそも人々に語り継がれてはこなかつたであろう。神代の神話であつても、記憶の伝承として共同性を帶び、何らかのリアリティを有している。遠い過去の記憶は、集合的無意識のうちに層をなして沈殿していることもあろう。神話の物語も、空間と時間の座標軸の交点を見定めることによつて真実性を帶びてくる。物語は奇想天外であつても、地理的空间と過去の時間の交点を起点にして記憶され、伝承されてきたものである。

たしかに伝承のプロセスを経て、物語は潤色され、デフォルメされるであろう。日本の神話はもともと統一的な物語としてあつたわけではない。氏族というそれぞれの血縁集団に伝承してきた神話を、大和朝廷<sup>(1)</sup>が天照大神を主神とする天皇氏族の物語の中に織り込んで構成したものである。したがつてその構成によつて、それぞれ

の氏族に伝承されてきた神話が消し去られたわけではない。日本神話を構成する物語は、列島各地域の特定の地点ど時点のリアリティを留めている。後に意図的に潤色されたとしても、それぞれの物語のもとになつた地点と時点の痕跡を読み解くことは可能である。空想の産物のように見える物語であつても、伝えられる地点を考古学的に掘り起こし、また過去の時点へと歴史学的に邇行することが可能である。神話をそのまま史実とするアナクロニズムは言わざもがな、神話をたんなる空想とすることもまた知の怠慢といえよう。

日本神話は天武天皇の勅命により、『古事記<sup>(2)</sup>』（七一二年）と『日本書紀』（七二〇年）として編纂された。『古事記』はその序によれば、稗田阿礼によつて誦習された物語を、太安万侶が「撰録」したものであるとされている。稗田阿礼は聰明で記憶力に優れた二八歳の「舍人<sup>(3)</sup>」とされ、おそらく朝廷に仕えた語り部集団のうちの傑出した一人だつたであろう。稗田阿礼は有力氏族に伝承されたそれぞれの神話を聞き取り、抜群の記憶力で誦習した。太安万侶はその誦習内容を筆記し、一まとまりの神話として編纂したと考えられる。その編纂方針にしたのが、天武天皇による勅命の次のよくな趣旨である。すなわち、「多くの氏族の持つてゐる帝紀〔皇統〕と本辞〔家伝〕はまったく真実と違ひ、多くの虚偽が加えられてゐる」ので、「帝紀を選び記し、本辞を調べ究めて、偽りを削り真実を定めて、後世に伝えたい」というものである。そこで太安万侶は勅命の趣旨に従つて、天皇氏族の物語を主軸にしつつ、各氏族の伝承を全体の中に織り込んで纏め上げたのが『古事記』である。太安万侶は大和朝廷の高級官吏<sup>(4)</sup>として、元明天皇への献上という使命をもつて編纂したことになる。そこには、天皇中心の律令制を確立しつつあつた大和朝廷の、その中核をなす天皇家の正統性を打ち出そうとする意図が自ずと働いてい る。しかし天皇家といえども、大和朝廷を構成する有力氏族を抜きにして存立できるわけではない。有力氏族や

在地豪族の伝承を神話全体の中に織り込むことは、律令制を全国的に拡大してゆくためにも必要なことであった。神代神話に見られる空間的広がりと時間的な系列にも、そうした事情が投影されている。

『古事記』が作成された当時、大和朝廷は天武・持統朝から元明朝への移行の時代にあつた。大和朝廷の空間地点も、時代とともに飛鳥から奈良へと移ることになる。すなわち大和朝廷は、持統朝に飛鳥淨御原宮から藤原京<sup>(5)</sup>へ遷都（六九四年）し、そして元明朝に藤原京から平城京へ遷都（七一〇年）する。この時代は律令制の確立期で、飛鳥淨御原令（六八九年）と大宝律令（七〇一年）によつて、律令国家体制が日本全域に組織されてゆく。その国家体制では、地域ごとに令制国としての「国」、そのもとに「郡」、そしてさらに「郷」へと行政区画が細分化される。また奈良時代初期には、元明天皇の詔によって国ごとに地誌すなわち『風土記』が編纂されている。こうして記紀神話の物語には、地域の伝承が織り込まれるとともに、大和朝廷による地方統治という現在的な課題もまた投影されることになるのである。

本稿では、記紀神話の中でも出雲国を舞台に展開される出雲神話について、空間軸と時間軸の交点で織りなされる物語の数々を考察することにしたい。<sup>(6)</sup> 出雲神話は大きく、須佐之男命<sup>(すさののみこと)</sup>の奥出雲における英雄物語（一）と、大国主神の因幡国から出雲国へと至る出雲国造りと國譲りの物語（二）に区分することができる。出雲神話が神代神話全体の三分の一を占める『古事記』を主たるテキストとして、それらの物語を空間軸と時間軸の交点から解説し、必要に応じて『日本書紀』や『出雲国風土記』を参照することにする。

## 一 須佐之男命の神話物語

### 高天原からの追放

出雲神話の本題に入る前に、それに先立つ高天原での須佐之男命の物語について、須佐之男命が高天原から追放されることになる経緯を見ておきたい。

須佐之男命が生まれたのは、伊邪那岐命が黄泉国での伊邪那美命の死の穢れを祓うために、日向の「阿波岐原」<sup>(はら)</sup>の瀬の水で禊<sup>(みそぎ)</sup>をしたことによる。その禊により、伊邪那岐命の左目から天照大神、右目から月読命、そして鼻から須佐之男命が生まれたとされる。鼻から生まれたという生まれ方からして、須佐之男命は異質である。そして伊邪那岐命から、天照大神には高天原を、月読命には夜の世界を、そして須佐之男命には海原を分治することが委任された。天照大神と月読命はその委任を素直に引き受けたのに対し、マザコン男の須佐之男命は拒否し、「亡き母親の伊邪那美命がいる根之堅洲国<sup>(ねのかたすくに)</sup>へ行きたい」と、大泣きする。それに怒った伊邪那岐命は、須佐之男命を追放することにしたのである。

ところで、追放されることになった須佐之男命は、根之堅州国に行く前に、事の次第を天照大神に弁明しようとした。その時、国土が震えるのに驚いた天照大神は、須佐之男命を迎え撃とうとする。須佐之男命は邪心がないことを証し立てるために、天照大神に「誓約<sup>(うけい)</sup>をして子を生む」ことを提案する。初めに天照大神が須佐之男の剣を折つて囁み碎き吹き出したところ、三女神<sup>(みわ)</sup>が生まれる。続いて須佐之男命が天照大神の髪飾

りの数珠玉を噛み碎いて吹き出したところ、天之忍穂耳命<sup>あめのおしほみのみこと</sup>を長男、天菩比命<sup>あめのほひのみこと</sup>を次男とする五男神が生まれる。この天菩比命は後に出雲国で重要な役割をはたすことになる。天照大神は、この五男神が自分の物美から生まれたのだから自分の子であり、三女神は須佐之男命の物実から生まれたのだから須佐之男命の子だと宣告する。須佐之男はその宣告を逆手にとつて、三女神が自分の子であるから己の心に邪心なく清明だと、勝手に勝利宣言をするのである。

須佐之男命はその勝利宣言の後、勝ち誇ったかのように乱暴狼藉を働くことになる。それは高天原の「田の畔を断ち切り、水路の溝を埋め」、また「大嘗<sup>おおにえ</sup>の御殿に糞を撒き散らす」というものである。さらに天照大神の「祭の神衣」を織る服屋に皮を剥いだ馬を投げ込み、それを見て驚いた服織女<sup>はたきぬりめ</sup>が「杼<sup>ひ</sup>で女陰を突いて死んでしまつた」。その時にはさすがの天照大神も恐れて天の岩屋<sup>いわや</sup>の中に籠つてしまい、そのために天上の高天原も地上の葦原中國<sup>あしはらのなかくに</sup>も真っ暗闇になつて、災いが起こつたという。このように須佐之男命は手に負えない乱暴者で、高天原では異質な存在として語られているのである。

そこで、天照大神を天の岩屋から誘い出すために、思金神<sup>おもいかねのかみ</sup>が作らせた大きな勾玉<sup>まがたま</sup>の玉飾りと八尺<sup>やあた</sup>の鏡を榊の木に掛けさせ、布刀玉命<sup>ふとまつのみこと</sup>が榊の木を捧げ持つて、天児屋命<sup>あめのこやのみこと</sup>が祝詞<sup>のりと</sup>を上げる。そして天宇受売命<sup>あめのうめのみこと</sup>が乳房をあらわにして下衣の紐を女陰まで垂らすという、ストリップまがいの踊りをする。それを見た神々がどつと笑つたところで、天照大神が天の岩屋の戸を少し開けて顔を出す。天児屋命と布刀玉命が差し出した鏡に誘い出された天照大神を手力男神<sup>あたからおのかみ</sup>が引き出した。こうして日の光が高天原と葦原中國に戻つて明るくなつたという。ここに登場する神々のうち天児屋命が中臣（藤原）氏の、布刀玉命が忌部氏の祖神であり、これら氏族が大和朝廷で重要な祭祀を司

ることになることは記憶に留めておきたい。

天照大神が再出現した後、須佐之男命はついに神々によつて追放されることになる。その時に、おおげつひめのかみ 大宜都比売神が鼻や口、また尻から取り出した食材で料理し盛りつけたのを見た須佐之男命は、汚いものを差し出したとしてこの女神を殺してしまつ。そうしたところ大宜都比売神の身体各部から、蚕や稻の種子、粟や小豆、麦や大豆などが生じた。そこでかむむすひのかみ 神産巣日神が須佐之男命にこれらを持たせたことから、須佐之男命は葦原中国に穀物の種子をもたらすことになる。こうした話は、『出雲風土記』で須佐之男命が穀物神とされていることと符合する。

### 八俣大蛇退治の物語

さて、出雲神話は須佐之男命の八俣大蛇退治の物語から始まる。高天原から追放された須佐之男命が目指したのは、亡き母の伊邪那美命がいる出雲の根之堅洲国だつたはずである。しかし須佐之男命が降り立つたのは、奥出雲の「鳥髪」である。そこで須佐之男命の八俣大蛇退治の物語を、その地理的空間と時間系列から解き明かすことしたい。

須佐之男命が降り立つたとされるのは、「出雲国の肥河」〔現・斐伊川〕の上流の鳥髪ひのかわ すなわち現在の仁多郡奥出雲町鳥上で、船通山の麓である。船通山は鳥取県と島根県の県境にあつて、鳥上は斐伊川の上流に位置する山間部の里である。川上から流れてきた箸を見つけて、須佐之男命は人が住んでいると思つて川を遡つていつた。箸を使って食事をするのは、米を食するそれなりの階層の人であつたであろう。そこにいたのは、山の神であるおおやまつみのかみ 大山津見神の子の足名椎あしなづち、その妻の手名椎たなづち、そして娘の櫛名田比売くなだひめ で、三人ともに泣いてゐる。訳を尋ねると、

「高志の八俣大蛇」が毎年やつて来て娘を食い、最後に八番目の娘が食われようとしているという。「高志」とは北陸の越のことと、出雲から見るとはるか遠方の地である。北陸は、弥生文化圏にあつた出雲から見ると空間的距離だけではなく、縄文文化を根強く残した異文化圏であつたと思われる。その「高志」からやつて来るおどろおどろしい八俣大蛇は、足名椎によれば「その体には檜や杉が生え、その長さは谷を八つ、峯を八つ渡るほど」の巨大さだという。

それに怖気づくことなく須佐之男命は、自らを天照大神の弟だと名乗つて、娘との結婚を申し出る。足名椎から承諾されたのを受けて、須佐之男命は娘を櫛に変えて髪に刺し、八俣大蛇に対峙することになる。漆塗りの櫛には、縄文時代から呪術的な力があると考えられてきた。そこで須佐之男命が思いついた策は、濃い酒を八つの酒樽に入れ、八俣大蛇に飲ませることだった。案の定、八俣大蛇は酒に酔つて眠り込んでしまった。酒を米から醸造したとすると、この奥出雲にはすでに水田稻作の米文化が入つていたことになる。そのことは、櫛名田比売が『日本書紀』で「奇稻田姫」と表記され、稻田の女神という意味があることとも符合する。船通山を源流とする斐伊川はもともと日本海に注ぎ<sup>(9)</sup>、したがつて日本海から斐伊川を遡上するルートで、稻作文化が奥出雲に入つたと想定することができる。奥出雲は七世紀後半（飛鳥時代）に律令制により仁多郡<sup>(10)</sup>に組み込まれるが、この仁多郡の「三<sup>(11)</sup>処の郷」は、『出雲国風土記』で「この地の田好し<sup>(12)</sup>」とされ、稻作に適していたことが分かる。ちなみに現在でも、奥出雲で収穫される仁多米はその美味しさで全国的に有名である。

ところで須佐之男命は、眠り込んだ八俣大蛇を「十拳の剣」ですたずたに切つたところ、肥河が「血の川」となり、そして切つた尾から大刀が出てきたという。須佐之男命の剣の刃が欠けたというから、尾から出てきた大

刀の方は鉄剣であろう。この八俣大蛇退治の物語は、奥出雲における銅剣文化から鉄剣文化への転換を象徴的に表しているであろう。<sup>(12)</sup> この物語は、奥出雲が古代から砂鉄を原料にしたたら製鉄によつて鉄器の産地であったことと無関係ではない。肥河が血の色に染まつたというのは、斐伊川上流から流れ出ていた砂鉄の錆色の表現であろう。古墳時代には奥出雲は、鉄器を作る鍛冶部の拠点の一つになつていた。斐伊川上流域の天狗松横穴墳墓（古墳時代後期）からは鉄剣が副葬品として出土しており、奥出雲における鉄剣文化の存在を示している。大和朝廷でも奥出雲は優れた鉄剣の産地として知られていたであろう。<sup>(14)</sup> 須佐之男命による八俣大蛇退治の物語は、鉄剣を産する奥出雲への関心ともあいまつて、大和朝廷の中でも話題にのぼつていたにちがいない。

須佐之男命は八俣大蛇から取り出した大刀を「草那芸の大刀」<sup>(15)</sup> として天照大神に献上することになる。追放の憂き目にあつた須佐之男命がどうして大刀を天照大神に献上したのか、という疑問が湧く。その神話的フィクションは、律令制によつて大和朝廷に組み込まれた奥出雲の在地豪族から、天皇家に鉄剣が献上されていたことを示すものと理解することができる。

### 須佐之男命の正体

須佐之男命は、高天原での乱暴狼藉とは打つて変わつて、奥出雲ではまさに水を得た魚のように、生き生きとした英雄として登場する。この変貌ぶりは同一人物のこととは思えない。とすると須佐之男命は、もともと奥出雲に伝承された英雄だつたのではないか。その須佐之男命の英雄伝承を、記紀編纂によつて神代神話の中に取り込んだのではないか。こうして須佐之男命が伊邪那岐命の子、天照大神の弟に仕立て上げられて、神話的フィク

ショーンとして織り込まれたと考えることもできる。

須佐之男命が奥出雲に伝承されていたことは、その謂れがある神社からも分かる。須佐之男命は八俣大蛇を退治した後、宮殿を出雲国の「須賀」に建て、妻の櫛名田比売と「夫婦のちぎりを結んで」子作りをしたとされる。その宮殿が、須佐之男命と櫛名田比売を祭神とする須我神社である。この神社の建つ須賀は、律令制下で仁多郡の北に接する意宇郡(おうのこおり<sup>16</sup>)に属することになる。須我神社の近くに建つ熊野大社もまた、須佐之男命の謂れのある神社である。すなわち、熊野大社の祭神とされる熊野大神すなわち櫛御氣野命は、須佐之男命と同一神であるとする伝承がある。しかも出雲国造(いずものくじみやつこ)を担うことになる在地の出雲氏の氏神は、櫛御氣野命すなわち須佐之男命とされている。その出雲氏のもともとの根拠地は、熊野大社の建つ意宇郡にあつた。律令制下で出雲国の行政の中心をなす出雲国府は、意宇郡の意宇川下流域に置かれることになった。その意宇川は、熊野大社の上流から中海(なかうみ<sup>17</sup>)に注ぎ、その下流域の平野部は意宇郡に広がっている。また出雲国府跡の周辺には大型古墳が見られ、その中の一つ山代二子塚古墳の被葬者は、出雲国造かそれに準じる豪族の長であると想定される。その古墳は古墳時代後期に属する最大規模の前方後方墳であることから、後方墳という独自性を有しながらも、ヤマト王権の象徴ともいすべき前方後円墳との関係を窺わせる。

こうしてみると、須佐之男命の神話物語は、奥出雲から出雲東部に広がる出雲国の形成を映し出しているといえよう。弥生時代には水田稻作文化が北部九州から日本海を経由して斐伊川を遡上し、奥出雲に入ってきた。また奥出雲は、弥生時代後期から古墳時代の初めには鉄の生産によつて、優れた鉄剣の制作拠点になつていた。須佐之男命の八俣大蛇退治には、そうした奥出雲の水田稻作と鉄剣の文化が背景になつている。さらに須佐之男命

が宮殿を建てたとされる須賀から中海へと注ぐ意宇川流域は、強大な在地豪族である出雲氏の拠点となっていた。こうして須佐之男命の後裔ともされる出雲氏は、律令制下の出雲国造として出雲東部を統治し、出雲西部に先立つて独自の政治・文化圏を形成したのである。

以上のように、須佐之男命の物語の舞台となつた奥出雲の仁多郡から意宇郡にかけての地域は、大和朝廷につて出雲国を統治する重要な拠点として、出雲神話の中でも時間的に最初に配置されたのである。それに続いて展開される大国主神の物語は、出雲西部を目指して空間的に移動してゆくことになる。

## 二 大国主神の神話物語

須佐之男命は櫛名田比売の他に次々と相手を変えて、子供をつくつてゆく。その中でも刺国若比賣との間に生まれたのが大穴牟遲神おおあなむじのかみ、すなわち後の「大国主神」である。この大穴牟遲神の物語になると、空間設定は主として日本海の沿岸地域になる。しかも因幡国（『古事記』での表記は「稻羽国」）から始まり、伯耆国を経て、出雲東部（現・島根県安来市～雲南市）から西部（現・島根県出雲市）へと空間移動してゆく。こうした空間の移動は、大和朝廷の畿内から見てより近くから遠くへという距離感によるものもある。その移動のプロセスについて、『古事記』にしたがつて地理的空間と時間系列の交点をそれぞれの舞台として、大きく三幕に分けて見ていくことにしたい。

## 因幡国の大穴牟遲神

第一幕の舞台は因幡国である。因幡国は、空間的に大和朝廷から見て出雲西部よりも近いばかりでなく、すでに七世紀後半には令制国となつて因幡国府が置かれ、朝廷からは身近に感じられていたであろう。その因幡国が大穴牟遲神の神話物語の出発地となる。

大穴牟遲神が多くの兄たち（八十神）と因幡に向かう途中、袋を担いで一人だけ遅れて気多前（現・鳥取県の白兎海岸）に着いた時、丸裸の素兎しろうさぎが痛みに苦しんで泣いているのを見つける。大穴牟遲神が訳を尋ねると、その兎は、住んでいた隱岐の島から気多に渡りたいとワニ（和邇）を騙したために、毛を剥がし取られたのだとう。そこに通りかかった八十神が「海水を浴びて、風に当たって寝ておれ」と言うので、その通りにすると皮膚が風に吹かれて裂かれたという。そこで大穴牟遲神に「真水で体を洗い、蒲の花を敷いてころがれば皮膚も治る」と教えられたとおりにしたところ、兎の体は元通りに治つたのだった。そもそも八十神が因幡に向かつていたのは、八上比売やかみひめに求婚するためであつた。そこで兎は大穴牟遲神に、「あの大勢の神は八上比売を得ることはできません。獲得するのはあなたです」と予言し、その予言通り、八上比売は八十神の求婚を拒否し、大穴牟遲神との結婚を宣言したという。そうしてみるとこの二人は、因幡の素兎によつて縁結びされたことになる。

この因幡の素兎の物語から、いくつかの情報を読み取ることができる。その一つは、因幡国の空間的位置に関することがある。素兎の物語の伝承地である白兎海岸は、かつての因幡国の大勢郡けたごおりの沿岸に位置している。その白兎海岸の少し西に位置する青谷上寺地遺跡あおやかみじちは、弥生時代前期から後期にかけての大型集落の跡を留めている。この遺跡からは渡来系弥生人の多数の人骨、弥生土器や青銅器、さらには朝鮮系の鉄器が発掘され、これらは朝

鮮半島との交流を示すものである。ここで注目すべきは、隱岐の島から気多前に渡つて来るために兎が騙した「ワニ」の正体である。「ワニ」と言えば、山陰地方の沿岸ではサメのことを指す。ワニは原文では「和邇」の漢字を当てているが、この漢字から大和朝廷で連想されたのは、ヤマト王権の成立に関わった和邇氏である。ここではワニ（和邇）は兎の毛を剥いだ悪者にされているが、和邇氏は隱岐の島から因幡国の気多に至る海上ルートを支配する海人族であるという認識は、朝廷内では共有されていたであろう。

もう一つは、因幡国の八上比売の出自に関する事である。八上比売は伝承不詳ながら、その「八上」が因幡国八上郡の元になつていていることから、在地豪族の娘と考えられる。その八上郡は因幡国最大の郡で、白兎海岸の東に流れる千代川から遡上した中流域に広がる豊かな平野部（現・鳥取平野）を擁している。八上比売は、八十神が揃つて求婚しに行こうとしたのであるから、その美しさで評判の女性だったのだろう。その八上比売を祭神とする壳沼神社は、八上比売の神陵<sup>(18)</sup>に隣接して、かつての八上郡の中心部（現・鳥取市河原町）に位置している。また八上郡の東に接する法美郡には、七世紀後半には律令制下で因幡国府（現・鳥取市国府町）が置かれ、在地豪族の因幡氏が因幡国造として因幡国一円を統治していた。このように八上郡一帯は因幡国府のお膝元であり、また水田稻作を基礎にした豊かな地域であった。こうした因幡国の八上比売との結婚は、大穴牟遲神にとって、その後の出雲国造りに向けた第一歩となつたのである。

大穴牟遲神の物語の次なる空間は、因幡国から西に移動した伯耆国<sup>(19)</sup>（『古事記』では「伯岐国」）である。この伯耆国（現・鳥取県の西部）は、西で出雲国と接する地理的位置にある。藤原京跡から出土した木簡に「波伯吉国」とあり、大和朝廷でも山陰道の令制国の一つとして知られていた。ただ令制国の伯耆国となつたとはいえ、

古墳時代以前には四隅突出型墳丘墓が造営されるなど出雲国との関係が深く、ヤマト王権からは独立した文化圏にあった。

ところで、大穴牟遲神に八上比売を取られて怒った八十神は、策略を立てて伯耆国の「手間てまの山」<sup>(19)</sup>の麓に大穴牟遲神を連れて行つて、火で焼いた大石で焼き殺した。そこで母親の刺国若比売が高天原の神産巢日神にお願いして、大穴牟遲神の命が蘇生する。しかしながらもや八十神は、大穴牟遲神を山に連れて行つて、木に挟んで殺してしまう。そこでまた母親が大穴牟遲神を木から取り出して生き返らせ、出雲から遠く離れた木国（紀伊国）の大屋毘古神（おやひこのかみ）の許へ逃れさせた。その大屋毘古神は、大穴牟遲神に須佐之男命のいる根之堅洲国へ行くように勧め、追手から逃した。

大屋毘古神は、もともと伊邪那岐命と伊邪那美命の神生みによつて生まれた家屋の神である。この神がいるとされる樹木豊かな「木国」<sup>(20)</sup>は、家屋の素材となる木と結び付けられているだけではなく、樹木の生命力を宿した地でもある。令制国となった「紀伊国」は、神武天皇の東遷における蘇生神話と結び付いて、大和朝廷では甦りの地「熊野紀伊」として知られていた。こうして大屋毘古神によつて生命力を賦与された大穴牟遲神は、根之堅洲国の須佐之男命の許へ赴くことになるのである。

## 大国主神の試練と出雲国造り

大国主神の神話物語の第二幕をなす最初の舞台が、根之堅洲国である。

根之堅洲国は、もともと須佐之男命が亡き母親の伊邪那美命を思慕し、そして高天原を追放されて目指した場

所である。再登場する須佐之男命はその國の主になつてゐた。大穴牟遲神は八十神の追手から逃れて、根之堅洲国で須佐之男命に出会うことになる。

それではその根之堅洲国は空間的にどこに位置しているのか。須佐之男命が亡き母親を求めていたことから、根之堅洲国は死者の世界である黄泉国と繋がつてゐることになる。しかし根之堅洲国は黄泉国そのものではないとすると、地上の葦原中国と地下の黄泉国との間に位置する仮想空間ということになろう。根之堅洲国が黄泉国から区別された空間であることは、そこには黄泉の神がないこと、そして須佐之男命があたかもまだ生きているかのような支配者であることからも想像することができる。根之堅洲国が地上のどこに対応しているかについて、記紀神話からは特定することはできない。ただ、黄泉国の入口とされる黄泉平良坂や伊邪那美命を祀る攝夜神社の位置する、現在の松江市東出雲町辺りが想定される。そこは伯耆国から西に入つた出雲國の東端に当たる。

大穴牟遲神が根之堅洲国須佐之男命の許に到着すると、須佐之男命の娘である須勢理毘売(すせりひめ)が出てきて、二人は早くも互いに一目ぼれして心をかよわせる。そこから出てきた須佐之男命は、すぐさまこの男が「葦原色許男」だと認知する。この名前は大穴牟遲神の別名であるが、「色許男」は現代で言えばイケメンの色男という意味であろうか。そこで須佐之男命は、大穴牟遲神に「蛇の室」「むかで蛇々と蜂の室」「火の野」での試練を課すが、須勢理毘売の助けもあって試練を乗り越えてゆく。<sup>(2)</sup>そして根之堅洲国から須勢理毘売とともに脱出しよとした大穴牟遲神に対して、須佐之男命は八十神を追い払つて大国主神となり、娘の須勢理毘売を正妻として、「宇迦の山」（出雲郡宇賀郷の山）の麓に宮殿を建てて住むように告げる。こうして見ると須佐之男命は、大穴牟遲神を憎からず思つていたのみならず、試練を課して自立へと導く役割を果たしたのである。

根之堅洲国から出発した大国主神は、須佐之男命からもらい受けた大刀と弓で八十神を追い払って、出雲国造りを始める。婚姻と子作りの物語には、恋多き色男の面目躍如たるものがある。婚姻と子作りは、武力によることなく勢力を拡大する有力な方策だったのであろう。大国主神は須勢理毘売を正妻にしたにもかかわらず、最初の妻である因幡の八上比売を連れて来る。しかし八上比売は正妻の嫉妬を恐れて、産んだ子を木の俣に挟んで因幡国へ戻ってしまった。

それに懲りることなく大国主神は、因幡国から空間的にさらに遠方の高志（越）国まで出かけて行つて、沼河比売ひめ(22)に妻問い合わせて求婚する。その時に交し合つた歌の概略は、大国主神が「遠い高志国に賢く美しい女がいると聞いて求婚しに来た。うるさく鳴く鳥どもは鳴くのを止めてほしい」と歌つたのに対して、沼河比売は、「私はあなたの鳥になりますよう。夜に来ていただき、私の泡雪のような若々しい胸を愛撫してください」と返したといふものである。そして翌日の夜には結婚したという。後に出雲国譲りの場面に登場する大国主神の二人の息子のうち建御名方神たけみなかたのかみは、越國の伝承ではこの沼河比売との間の子とされる。

この沼河比売の名の「沼河」は、『万葉集』（第一三卷三二四七）で「瀧名河」と記され、「底なる玉」と結び付けられている。この河は「姫川」とも呼ばれて、この糸魚川断層の川底で採れる翡翠で知られていた。この翡翠は縄文時代から勾玉の素材として使われ、この地で加工された翡翠勾玉は、交易ルートで列島各地に伝わつて首飾りなどとして珍重された。その形は胎児を彷彿とさせて、生命の根源力を秘めた呪物としても崇められた。翡翠から作られたであろう「八尺瓊勾玉」は、天の岩屋に隠れた天照大神を誘い出し、また邇邇芸命が降臨する時に持たされたとされる三種の神器の一つとして伝わるものである。

ところで、大国主神と沼河比売との結婚に対する対応では、案の定、嫉妬深い須勢理毘賣が激怒することになる。そこで大国主神は、出雲から倭(やまと)（大和）国に上京すると装つて旅支度をし、馬に乗ろうとして次のように歌う。〈愛しい我が妻よ。私がここを去つたなら、お前の泣くさまは嘆きの霧のように立つことだろう〉。それに対しても須勢理毘賣は、〈私にはあなたの他に夫はいません。泡雪のような若々しい私の胸と白い腕を愛撫するようにお休みください〉と歌つて、酒杯を手に駆け寄る。そして酒杯を交し合つたところで二人は首に手を回し合い、大国主神はそのままそこに留まつたという。遠くの大和に行くと見せかけて妻の嫉妬心をなだめる大国主神の手口は、色男ならではのものであろう。こうした『古事記』の中の二人の掛け合いは、大和朝廷では男女を問わず大受けしたにちがいない。

大国主神はそれに止まらず、須佐之男命の子とされる多紀理毘賣命にまで手を出して子供を生ませたのを始め、多くの女神との間に次々と子供をもうけてゆく。大国主神が八千矛神の別名を持つゆえんである。大国主神による精力的な婚姻と子作りは、出雲国造りの根幹をなすものである。

さて、出雲国造りの舞台は次に美保岬(みほのみさき)に移る。この岬は島根半島の東端に位置し、その高台には事代主神(ことしろぬしのかみ)を祭神として祀る美保神社が建つ。その謂れについては後述することにして、『古事記』の物語に戻ろう。大国主神が「出雲の美保岬」にいたところ、舟に乗つて近づいて来る小さな者が見えた。素性が分からず案山子(かかし)に問い合わせたところ、「神産巢日神の子の少名毘古那神(すくなひこなのかみ)<sup>23</sup>」だという。そこで天上の神産巢日神に確認したところ、「私の指の間から漏れ落ちた子です。あなたの兄弟として一緒に國を作り固めなさい」と告げた。そこで一緒に國造りを進めたものの、途中で少名毘古那神は常世国に去つてしまつた。

大国主神が一人になつて心配していたところ、海面を照らして近づいてきた神が、「私を祀るなら一緒に国を作りましょう」と言う。そこで大国主神がどのように祀ればよいかを問うたところ、「私を倭の青々と垣をなすその東側の山の上に祀りなさい」と応えた。そこで大国主神が出雲国を完成させるために祀った神は、「御諸山<sup>(24)</sup>の上に鎮座している神」であるという。「御諸山」は「倭の東側の山」とされる三輪山のことで、そうだとすることに鎮座する神は大物主神だということになる。

海を照らしてやつて来た神を三輪山に祀ることによつて出雲国作りが完成したという物語は、何を意味しているのであるうか。その大物主神が海の向こうからやつて來たという登場物語には、出雲に伝わる龍蛇神の伝承が背景にあると考えることができる。三輪山の祭神である大物主神の正体が蛇であるとする伝承は、出雲の龍蛇神信仰とつながっている。その龍蛇神信仰は現在でもなお、出雲大社<sup>(25)</sup>教の龍蛇神講<sup>(26)</sup>大祭<sup>(27)</sup>という形で受け継がれている。そうしてみると、出雲と三輪山をつなぐ大物主神の伝承には、龍蛇神信仰が深く関わっているといふことができるるのである。

そこで大物主神を祖神とする三輪氏の出自と出雲との関係が問題になる。三輪氏は大物主神を祭神とする三輪山を神体として奉斎する氏族である。三輪氏の祖神である大物主神が三輪山に祀られて出雲国造りが完成したという物語に、三輪氏の出自が示されている。三輪氏は大物主神を奉斎する海人族の一派で、歴史的に見て北部九州から出雲へ、そこからさらに大和の三輪山西麓に入つて來たとする説<sup>(28)</sup>がある。こうして大物主神の一連の神話物語は、出雲から大和の地に入り、大物主神を三輪山に祀つてその西麓の磯城<sup>(29)</sup>を拠点にした三輪氏の歴史的プロセスを反映していると考えることができるのである。

大国主神による出雲国造りの完成をもつて第一幕は閉じられることになる。第一幕の因幡を舞台にした大穴牟遲神の物語から、第二幕の大國主神の試練と婚姻の物語までは、『日本書紀』では欠落している。この部分が欠落しているのは、すでに出雲国が律令制の下に統合された段階では、大和朝廷にとつて無視してもよかつたからであろう。むしろ大和朝廷にとつて最大の関心事は、ヤマト王権に先行した出雲国の統治権が、天皇氏族の祖神である天照大神にいかにして譲られたかという物語である。

### 大国主神による出雲国譲り

大国主神の神話物語の第三幕をなす舞台は、完成した出雲国である。その出雲国を舞台にして繰り広げられる国譲りの物語を見てみよう。

出雲国が完成したことを天上で知った天照大神は、葦原中国の「とよあしはら豊葦原の水穂國」を治めるのは長男の天忍穂耳命であるべきだと考えた。ここで「水穂國」は、葦原中国の中でも出雲国が水田稻作の豊かな地であることを暗示している。そこで天忍穂耳命を天降りさせようとしたが、当の本人はその水穂国が「たいそう騒がしい」と腰が引けて、途中で戻つてしまふ。そこで高御産巢日神と天照大神が神々を集め、思金神の発案に従つて、天照大神の次男である天菩比神あめのほひのかみを「葦原中国」に派遣するが、大国主神に媚びてそこに居着いてしまい、三年経つても戻つてこない。そこでまた思金神の発案で、天若日子あめのわたりこを「葦原中国」に派遣したが、大国主神の娘の下照毘売ひめと結婚して、八年経つても報告してこない。その訛を問い合わせるために雉子きじの鳴女なきめを遣わしたところ、天若日子の放つた矢で射殺されてしまう。そこで高木神たかぎのかみ（高御産巢日神の別名）は、飛んできたその矢を衝き返したと

ころ、天若日子に命中して死んでしまった。

そこで天照大神が最後の頼みにしたのは建御雷神(29)で、天鳥船神(29)を付けて葦原中国に派遣(30)した。そもそも建御雷神は、火之迦具土神を生んだ伊邪那美命が火傷を負つて死んだために、伊邪那岐命が悲しみのあまり火之迦具土神の首を切った血から生まれた、雷と剣の神とされる。その建御雷神が「出雲国(31)の伊耶佐(32)の浜」（現・稻佐の浜）に降り立つ。ここに、完成された「出雲国」の空間地点が初めて示されることになる。この浜は島根半島の西端に位置しており、そこから東に少し入った所に現在の杵築（出雲）大社が建つ。この空間地点は、令制国としての出雲国の中でも「出雲郡」の最も西に位置している。その出雲郡は、奥出雲の仁多郡や出雲国府の置かれた出雲東部の意宇郡と比べて、遅れて令制国に組み入れられた地域である。

伊耶佐の浜に降り立つた建御雷神は、自らの剣を波頭に刺して剣先に胡坐をかき、大国主神に対して「天照大神と高木神は葦原中国を天孫の統治すべき国とされているが、おまえはどう思うか」と問う。それに対して大国主神は自分の考えを述べずに、「我が子の事代主神が答えるでしょう」と、息子に下駄を預けた。事代主神(31)は美保岬に「鳥と魚の獵」に行っているというので、天鳥船神を遣わして問うたところ、「この国は天孫に献上しますよう」とあっけなく承諾して、姿を隠したという。

さらに建御雷神は、大国主神のもう一人の子とされる建御名方神(32)にも献上の意思を確認するが、事代主神とは違つて、力競べを挑んで抵抗する。しかし最後には建御名方神が建御雷神に力負けして、科野国(32)（信濃国）の洲羽海（諏訪湖）まで逃げた。そして命乞いする建御名方神は、大国主神と事代主神に背くことなく、葦原中国を天孫に献上することに同意したという。そこで建御雷神は出雲国に戻つて、大国主神に改めて意思を確認したと

ころ、二人の子供に従つて葦原中国を献上することを約束した。ただその条件として、自分の住処として「宮柱（みやばし）」を太く立て、千木を高く（たかく）造つてくれるよう要望する。建御雷神はその要望を受け入れて、「出雲国（いずみくに）の多芸志（たぎしひのこ）」（はま）浜（はま）に宮殿「天の御舍（あめのみあらか）」<sup>〔34〕</sup>を造り、大国主神はこの宮殿に隠れたといふ。こうして建御雷神は高天原に戻つて、葦原中国を平定した経緯を報告した。以上が第三幕の大國主神による出雲国譲りの物語である。

それでは大国主神のその宮殿は、そもそも空間的に出雲国のどこに設定されているのであるか。宮殿の場所として明示されているのは「出雲国（いずみくに）の多芸志小浜（たぎしこはま）」であるが、その小浜は地名として現在遺つていない。ただし、杵築大社境内の東に隣接する真名井遺跡（まないせき）が、多芸志小浜の「天の御舍（あめのみあらか）」跡と考えられる。その遺跡から銅戈や翡翠勾玉が出土していることから、杵築大社の創建前にこの地が聖地として拝されていたことが分かる。<sup>〔35〕</sup>「多芸志小浜」という名前から、「天の御舍」は川の岸辺に位置していく、その川は斐伊川であると考えられる。斐伊川はもともと、現在の杵築大社の南側を西に流れ、入り江の「神門水海（かむどのみずうみ）」から日本海へ注いでいた。<sup>〔36〕</sup> そうだとすると多芸志小浜は、その入り江に通じる斐伊川の岸辺ということになろう。そうした入り江に面した場所は、宮殿の料理人として大国主神に仕えることになった櫛八玉神（くちやたまのかみ）が、鵜に姿を変えて海底に潜つて仕事をしたという『古事記』の描写とも符合する。いずれにしても多芸志小浜が島根半島の西端近くの川辺にあつたことはまちがいない。<sup>〔37〕</sup>

そこで、改めて杵築大社の周辺に目を向けてみよう。杵築大社の建つ「出雲郡（いずものくに）」の「杵築郷（きつきのさと）」は、大国主神神话と不可分に結び付いた出雲国（いずみくに）の西部の中心をなしている。かつての斐伊川下流域両岸の平野部は、弥生時代の出雲西部における先進的な水田稻作地帯であった。そのことは、『出雲国風土記』に「斐伊川下流の両岸は土地

豊かに沃えて、穀物がたわわに稔る」<sup>(38)</sup>とあること、そして天照大神が葦原中國を「豊葦原の水穂國」と呼んだことからも分かる。

水田稻作を伴う弥生文化は、先進地域の北部九州から日本海を通して出雲西部へ入ってきた。そしてその出雲西部では、出雲東部とは異なった有力豪族が支配していたと考えられる。この豪族は北部九州の水田稻作文化と銅劍文化を受容して、日本海に開かれた出雲西部に大きな勢力を形成した。こうして見ると出雲西部には、大和朝廷の律令制統治下に入った出雲東部の意宇郡から独立した勢力が厳然と存在していたのである。<sup>(39)</sup>

そのことは、出雲平野を望む丘陵斜面の荒神谷遺跡に、銅劍が三五八本、銅矛が一六本、銅鐸が六個、まとまつた形で埋納され、また加茂岩倉遺跡には銅鐸が三九個埋納されていたことによつても示されている。これらの青銅器は弥生時代中期に製作されたと推定されている。<sup>(40)</sup>また多くの銅劍や銅鐸に同じ×印が刻まれていることから、出雲西部にすでに弥生時代中期にはこれらの青銅器を統一的に管理する大きな勢力が存在したことが窺われる。<sup>(41)</sup>とりわけ銅劍については、同じ銅劍文化圏の北部九州との交流があつたであろう。また、加茂岩倉遺跡近くの神原神社古墳から景初三年（二三九年）銘の三角縁神獸鏡が出土したことによつて、その被葬者と邪馬台国の女王・卑弥呼との関係も想定される。<sup>(42)</sup>さらに銅鐸については、同じ銅鐸文化圏の畿内と出雲西部との交流が示される。ということは、出雲西部は銅劍文化圏と銅鐸文化圏の交錯する空間的位置を占めていたことになる。そして銅劍や銅鐸などの青銅器がまとめて埋納されたことは、出雲西部における青銅器文化から新たな鉄器文化への転換を示しているのである。

さらに出雲西部には、弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓が、かつての斐伊川下流域の南に位置する丘陵地に大

型の西谷墳墓群<sup>(44)</sup>として集中している。このことはヤマト王権の象徴ともいべき前方後円墳に先立つて、四隅突出型墳丘墓によつて象徴される独自の首長権力が出雲西部に形成されていたことを示している。そればかりではなく、四隅突出型墳丘墓は島根県東部（松江市・宍粟市）から鳥取県（米子市・伯耆町・大山町など）、さらに北陸の福井県や富山県にも分布している。これらの地域は、越国まで含めて大国主神にまつわる神話物語の舞台になつた日本海沿岸地域に文化的に連なつてゐることになる。そうだとすると、大国主神の神話物語の背景に、北陸から出雲にかけての首長連合の文化圏を想定することができよう。四隅突出型墳丘墓はその文化圏の象徴であり、その文化圏の中心をなしたのが出雲西部ということになる。さまざまな顔を持つ大国主神は、こうした地域の首長が神格化されたもので、それらを統合した王権の象徴であると考えることができる。

出雲西部に根差した在地豪族の独自の勢力は、いち早く律令制下に入つた出雲東部の豪族と違つて、大和朝廷に執拗に抵抗したのである。しかし、豪族間の大和朝廷に対する抵抗の違いがあつたにせよ、最終的には出雲西部もまた令制国の「出雲国」の中に「出雲郡」や「神門郡」<sup>(45)</sup>という形で組み込まれた。大和朝廷に対する出雲西部地域の豪族の抵抗は、建御雷神に対する大国主神の子の対応の違いといふ形で、国譲りの物語に示されている。いざれにしても出雲西部が律令制に組み込まれた歴史的転換が、大国主神による出雲国譲りの神話物語に投影されていると考へることができる。出雲国譲りの物語は、出雲西部の勢力の大和朝廷への服属を意味している。すなわち大国主神が国譲りの代わりに宮殿を建ててもらつたという物語は、大和朝廷が杵築大社を建てて出雲西部を律令制の下に組み込んだことを示している。杵築大社の創建時期については不明であるが、大和朝廷が雄大な大社を「出雲郡」の「杵築郷」<sup>(きづきのさと)</sup>に建てたのだとすると、その時期は律令制の確立期である七〇〇年前後と

いうことになろう。<sup>(46)</sup> 大和朝廷は出雲西部の豪族の支配地域をあえて「出雲郡」「杵築郷」と命名して、朝廷による統治を顯示したとも言えよう。すなわちそのことは、出雲西部の豪族がその独立した統治権を放棄して、「出雲国」の「出雲郡」として律令制のもとに組み込まれることを容認したということでもある。大和朝廷による「出雲郡」統治の象徴こそ、杵築大社の建立だったのである。

ここで想起したいのが、「葦原中國」に派遣されながら、三年経つても戻ってこなかつた天菩比神のことである。<sup>(47)</sup>『古事記』では、その後の天菩比神のことは語られていないが、その子である建比良鳥命が「出雲國造」の祖先<sup>(48)</sup>とされていることに注目したい。国造とは律令制下で任命された在地豪族の行政官職で、出雲国造にも大和朝廷によって在地豪族が任命されている。<sup>(49)</sup>出雲国造を担つた在地豪族が「出雲氏」であるとすると、その始祖が天菩比神ということになる。その天菩比神が天照大神の次男とされているのであるから、建比良鳥命は天照大神の孫という系譜になる。そのような系譜によつて、出雲氏は天照大神につなげられている。こうして天照大神によつて出雲に派遣された天菩比神が大国主神のもとに居着いてしまつた、という神話物語が構成されたのである。こうした物語の背景には、意宇郡の豪族である出雲氏が、意宇郡に置かれた出雲国府の管轄を大和朝廷によつて任じられていた、という史実があつたと考えることができる。すなわち、出雲氏は大国主神による「国譲り」に先立つて、出雲国造の官職を与えられて大和朝廷に帰順して組み込まれたということである。そして出雲国造家は、出雲西部の「出雲郡」に造られた杵築大社の祭祀をも兼ねることになつたのである。<sup>(48)</sup>

最後に、建御雷神に追われて出雲から諏訪湖に逃げた建御名方神について、信濃国とどのような関係があるのかを見ておきたい。<sup>(49)</sup>『古事記』では、建御名方神は出雲国譲りを受け入れて諏訪湖に鎮まつたとされる。建御雷

神に命乞いをした建御名方神であるが、しかし諏訪大社を始め全国の諏訪神社で祀られる建御名方神は、諏訪大明神として信仰されている。とりわけ越国（新潟県）と信濃国（長野県）には諏訪神社が集中的に数多く見られ、そこに建御名方神のルーツが示されている。

『古事記』には建御名方神の母親の名はないが、他方でこの神には大国主神と越国の沼河比売との間の子とする伝承がある。<sup>(50)</sup> また『出雲国風土記』にも、大国主神が「高志国」の神の子「奴奈宜波比売命」を娶って産んだ神が、「御穗須々美命」<sup>(51)</sup>であるとする記述がある。その御穗須々美命が建御名方神と同一神だとすると、この神は越国一族の血筋を引くことになる。沼河比売は前にも述べたように、越国の姫川に産する翡翠と結び付いて、縄文時代の面影を伝えている。姫川流域は長者ヶ原遺跡<sup>(52)</sup>に見られるように、縄文時代前期から翡翠勾玉の加工・生産の中心地であった。諏訪湖の南に建つ諏訪大社の上社は建御名方神を祭神とするとともに、同じ境内の社には越国に出自をもつ母親の沼河比売も祀られている。その上社には鹿の頭を神前に供える神事（御頭祭）が伝えられており、狩猟的な縄文文化の痕跡を留めている。<sup>(53)</sup>

建御名方神が越国生まれだとすると、この神一族は越国から現在の糸魚川市を流れる姫川を遡り、安曇野を経て諏訪に入つたと想定される。縄文系の血筋を引く越国の一族の統率者が、神格化されて建御名方神となつたのである。そうだとすると、大国主神の子である建御名方神が出雲から諏訪湖まで逃げて鎮まつたという物語は、出雲の国譲りと信濃国を関連づけるための神話的フィクションということになる。いずれにしても建御名方神は諏訪の土着の神ではなく、外から諏訪に入りながら諏訪大社の祭神になつたと考えられるのである。

その縄文系の集団は外来でありながら、八ヶ岳山麓から諏訪湖畔に先住していた縄文人に合流したのであろう。

そこに諏訪湖周辺の地理的空間と重層的な歴史が浮かび上がってくる。諏訪湖の東に連なる八ヶ岳山麓には、かつて縄文人の数多くの堅穴住居集落が点在していた。山麓は森林に覆われて、山菜や堅果類、野生の獣など食料に不自由することなく、また山襞を流れる川の水にも恵まれていた。その西麓から諏訪盆地に下れば、水を湛えた諏訪湖で魚を獲ることもでき、諏訪湖岸もまた豊かな生活空間であった。縄文時代前期は七〇〇〇年前から五〇〇〇年前の地球の最温暖期に当たつていて、諏訪湖は現在よりも水面が高く、面積は現在の三倍以上にも及んでいた。湖畔の高台に建つ諏訪大社上社・下社の位置は、かつての湖岸からそう離れてはいなかつたであろう。こうして建御名方神の祀られた諏訪湖畔は、縄文文化の色濃い生活空間だつたのである。<sup>(54)</sup>

ところで諏訪湖を挟んで諏訪大社上社の北側に建つ下社には、建御名方神とともにその妃神である八坂刀売神<sup>(55)</sup>が祭神として祀られている。それでは八坂刀売神はどのような出自であろうか。この女神は記紀には登場しないものの、その出自が海人族の安曇氏にあるとする説<sup>(56)</sup>がある。信州安曇野の地名が安曇氏に由来することからも、この説は納得がいく。それにしてもなぜ海人族である安曇氏は、山岳に囲まれた信州に入つたのであろうか。北部九州沿岸を拠点とした海人族の安曇氏の中でも、稻作文化を選んだ支族が船で日本海から姫川に入り、上流の安曇野に広がる扇状地で水田稻作を営んだと考えることができる。安曇野の中心部に位置する穗高神社<sup>(57)</sup>には、海人族である安曇氏の祖神すなわち綿津見神<sup>(58)</sup>が祀られ、綿津見神を祀る總本社の志賀海神社とのつながりが示されている。さらに安曇野から松本盆地を経由して、塩尻峠を越えれば諏訪湖北側に至る。そこに建つ諏訪大社下社の祭神が八坂刀売神なのである。その名の「ヤサカトメ」は豊作呪術の巫女を表しており、また下社には農作物の豊凶を占う神事が伝えられるなど、弥生系の安曇族によつてもたらされた稻作文化との関係が窺われる。

縄文時代後期になると、列島の気温が冷涼化して諏訪湖の水面が低下する。そして、日本海から安曇野を経由して北湖畔に入ってきた弥生系の安曇族が定住したと考えられる。その集団の祭祀巫女が八坂刀売神として神格化され、諏訪大社下社の祭神となつた。諏訪大社の上社と下社の諏訪湖を挟んだ分立は、以上のような集団の空間移動と縄文時代から弥生時代への時間経過を背景にしているのである。

## おわりに

以上、出雲神話について、空間と時間を軸にして解説してきた。空間については記紀神話に記された地名や遺跡などを手掛かりにして、神話上の地点を確定してきた。また時間については、記紀神話の時間系列にしたがって読み解いてきた。しかしその時間系列をそのまま史実と重ね合わせることには、少なからぬ疑問を抱かざるをえない。神話的な時間構成には、編纂者とその背後にある大和朝廷の意図が介在していると考えざるをえないからである。そこで、確定された空間的地点と確認しうる史実を手掛かりにして、歴史的な時間構成を最後に試みることにしたい。

出雲神話の時間系列の構成は、おおまかに次のようになつていた。すなわち奥出雲を舞台にした須佐之男命の八俣大蛇退治と櫛名田比売との物語から始まり、続いて大国主神の一連の物語、すなわち因幡を舞台にした大穴牟遲神と素戔、および八上比売との物語、根之堅洲国の大須佐之男命による試練の物語、そして出雲国を舞台にした大国主神による国造りと国譲りの物語という時間構成である。一連の物語の舞台となるのは、まずは奥出雲で

あり、そして因幡から根之堅洲国を経て出雲国へというように東から西へと空間移動してゆく。この空間移動は、はたして史実としての歴史的な時間系列に沿つたものであろうか。むしろ大和朝廷の視点から見た空間的遠近法によるものではないのか。そこで改めて大和朝廷の視点から、神話の舞台となつた空間を見てみよう。

まず出雲神話の最初の舞台となる奥出雲は、神話上の時間系列で最初に、すなわち最も遠い過去に配される。現代のわれわれからしても、奥出雲は島根県の山奥に位置していて、文化的にも遠い過去に属しているように思いがちである。しかし、畿内の大和朝廷の視点からすると、奥出雲はかつての吉備国の北端と接して、瀬戸内海から吉備国を経由して入ることのできる地であり、その意味で日本海側に迂回して入るよりも近い位置にある。須佐之男命が降り立った奥出雲の鳥髪は、吉備国の北境に位置する現在で言う船通山の山麓にある。しかも吉備国の中でも備中国（岡山県西部）は、鉄の生産では先進地域で、鉄剣文化という点で奥出雲と共通していた。須佐之男命が八俣大蛇の尾から取り出した鉄剣を天照大神に献上したという物語は、朝廷の人々にとつて精神的にも身近に感じられたことであろう。しかも、律令制により出雲国の仁多郡に属する奥出雲は、出雲国府の置かれた意宇郡に接する、制度的にも大和朝廷に属する地域だった。そうだとすると、須佐之男命が最初に降り立つた奥出雲は遠い過去の地ではなく、むしろ大和朝廷にとつて歴史的にも身近な地だということになる。

次に登場する大穴牟遲神の最初の舞台が因幡国である。因幡国はすでに飛鳥時代に大和朝廷によって令制国と定められ、在地豪族の因幡国造がこの国を統治していた。その中でも最大の八上郡を擁する因幡国は、後に大伴家持ら朝廷の要人が因幡守として赴任したことからしても、大和朝廷にとつて山陰道の重要な令制国の一つであった。<sup>(57)</sup> しかも因幡国は大和朝廷の藤原京からは、琵琶湖を経由して若狭湾からの海路を使えば、瀬戸内海からは

るか出雲を迂回するよりも近い位置にあつた。その因幡国にまつわる素戔や八上比売の伝承によつて、大穴牟遲神の物語は朝廷の人々にとつて身近に感じられたであろう。

その因幡国に統いて舞台となる伯耆国は、空間的には因幡国に西で接する地域にある。時間系列としては、大穴牟遲神が八上比売と結婚した後、そのために伯耆国で八十神に殺され、生き返つては迫害されるというように展開してゆく。その意味で伯耆国にはあまりいいイメージがない。ましてや伊邪那美命が葬られたのが「出雲国と伯耆国との境の比婆山」とされ、伯耆国には死のイメージも重なつてゐる。伯耆国から舞台は須佐之男命の根之堅洲国に移るが、そこは黄泉国へと通じる、空間的には伯耆国に接する出雲東部（現・東出雲町）が想定される。

根之堅洲国から舞台は出雲西部へと移ることになる。そこは大国主神が出雲国造りを行うことになる空間である。大国主神の起点を因幡国とすると、そこは終着点で、時間系列からしても、出雲神話の最後の場面となる。その出雲西部は大和朝廷からの空間的遠近法からすると、山陰道の中でも最も遠方に位置している。しかも大国主神による国造りが出雲西部で最後に完成したという物語には、歴史的背景があると思われる。出雲国の中でも大和朝廷によつて国府の置かれた意宇郡と比べて、西部の強大な在地豪族が最後まで朝廷に抵抗したと考えられるからである。出雲西部は弥生時代以来の北部九州との交流によつて、斐伊川下流域の稻作文化や銅劍を始めとする青銅器文化を築いてきた。その強大な勢力の象徴は、ヤマト王權の象徴ともいふべき前方後円墳に先立つ隅突出型墳丘墓である。そうした歴史的の背景から、出雲西部は大和朝廷からの空間的な遠さだけではなく、文化的にも疎遠な地域として認識されていたと思われる。出雲国造りの完成が大物主神を三輪山に祀つたことによる

という神話物語には、大物主神の龍蛇神伝承がつきまとつており、ヤマト王権の中軸をなす天照大神信仰とは異質である。

ところで出雲国をめぐる大和朝廷にとつての課題は、大きな勢力を維持する出雲西部の豪族をいかに律令制の中に組み込むかということであった。その歴史的プロセスが、大国主神による天照大神への国譲り神話に投影されている。出雲西部の豪族の中でも抵抗勢力は、諏訪湖に逃げた建御名方神として神話化されている。大和朝廷は、最終的に武力によることなく抵抗勢力を抑え込んで、出雲西部を律令制によつてようやく「出雲郡」として出雲国に組み込んだのである。この出雲郡を統治下に収めた大和朝廷は、国家的事業として雄大な杵築大社を建築した。その史実が大国主神による国譲り神話として、出雲神話の最後に配置されたと考えることができる。こうして、出雲国の中でも大和朝廷から空間的に遠く、また政治的布置関係からも疎遠であった出雲郡は、時間系列においては最も現在的な地域だつたのである。

## 《注》

引用文中の「」は、筆者による補足を示す。

- (1) 本稿では、飛鳥時代の飛鳥京から藤原京にかけて成立した王権組織を、それ以前の古墳時代における形成期の「ヤマト王権」から区別して「大和朝廷」と表記することとする。「大和朝廷」の「大和」(やまと)の表記が使われるのは、上田正昭によれば養老令成立(七一八年)からで、『古事記』成立前後では「倭」の表記が使われている。なお「朝廷」の組織が、王室を核とした「内廷」と行政府としての「外廷」から成ることについては、上田正昭『大和朝廷』講談社学術文庫、一九九五年、一九頁を参照。

- (2) 『古事記』からの引用は、次の現代語訳を参考にして、筆者が手を加えている。日本古典文学大系『古事記 祝詞』(岩波書店、昭和三三一年)、および中村啓信・訳注『古事記』(角川ソフィア文庫、令和元年)。
- (3) 平田篤胤は稗田阿礼を、天宇受命の子孫で女舎人としている。
- (4) 太安万侶は『古事記』を元明天皇に献上する七一二年の前年に、正五位に昇格している。
- (5) 元の名称は新益京<sup>あらまちのみや</sup>で、「藤原京」という名称で呼ばれるようになったのは、近代の大正時代になつてからである。
- (6) 出雲神話の時間系列に従つた物語の概要については、拙稿「日本神話の多元的構造—『古事記』解説への視座—(上)」『人文研究』第二〇二号、神奈川大学人文学会、一〇二一年所収を参照されたい。
- (7) 多紀理毘売命<sup>たきりひめこと</sup>、市寸島毘売命<sup>いちすじまひめこと</sup>、多岐都比売命<sup>たきつひめこと</sup>の三女神で、それぞれ玄界灘に並ぶ冲ノ島の沖津宮、筑前大島の中津宮、宗像市田島の辻津宮に祀られている。宗像大社をなすこれら宮は、北部九州から朝鮮半島へと至る海北道中のルート上にあつて、三女神を奉ずる海人族の宗像氏はその海上交通路を支配していた。
- (8) 高天原に現れた造化三神のうちの一柱で、天御中主神と高御產巢日神に統いて現れる。高御產巢日神が天孫族の司令塔のような役割を果たすのに対して、神產巢日神は出雲族の司令塔のように、高天原から出雲族に要所に応じて手助けをすることになる。
- (9) 斐伊川は現在では宍道湖へと注いでいるが、もともとは出雲大社の南を流れて、神門水湖から日本海へと注いでいた。たびたび洪水を引き起こした斐伊川の流れを、江戸時代に工事によって宍道湖へと注ぐように替えて、現在の姿になった。角川源義他『日本史探訪 別巻古代編 II』角川書店、一九七五年、一七六頁を参照。
- (10) 『出雲国風土記』は元明天皇による編纂勅命(七二三年)により、七三三年に完成した。
- (11) 荻原千鶴『出雲国風土記 全訳注』(講談社学術文庫、一〇一三年、二六七頁)。現代語訳に筆者が手を加えた箇所がある。以下同様。
- (12) 新谷尚紀は、須佐之男命による八俣大蛇退治の神話に、「銅劍から鉄劍へ」という文化変容<sup>かほじよみやげ</sup>を見ている。『伊勢神宮と出雲大社』(講談社学術文庫、二〇二〇年、一五五頁)。
- (13) 斐伊川と奥出雲の鍛冶部との関係については、松前健『神々の系譜』(吉川弘文館、一〇一六年、一一二頁)を参照。

- (14) 奥出雲に瀬戸内海側から通じる吉備国の中もまた、古代から鉄器の生産でも奥出雲と共に通しており、大和から奥出雲へはこの鉄のルートが考えられる。
- (15) 『日本書紀』では「草薙劍」と表記される。草薙劍は、邇邇芸命が高千穂峰に降臨するに際して天照大神から手渡され、その後、日本武尊の手に渡った劍は、日本武尊の死後、その妻である宮賣媛によつて熱田神宮に祀られた。
- (16) 「意宇」の語源については『出雲國風土記』に以下のようないくつかの「国引き」の記述（前掲書、五〇七頁）がある。すなわち八束水臣津野命（須佐之男命の五世孫）が出雲国はまだ小さいので、志羅紀（新羅）や高志の岬を、それらの国の余りとして引き寄せて出雲国に縫い合わせ、最後に意宇杜に杖を衝き立てて「意恵」と言つたことによるとする。
- (17) 意宇郡沿岸と島根半島の間に弥生時代には砂洲があつたが、その砂洲も七世紀には水没して、『出雲國風土記』に「飲宇の入海」とあるよう、外海に開かれた湾になつてゐた。
- (18) 全長五〇メートルの前方後円墳で、嶽古墳と呼ばれている。
- (19) 「手間」は伯耆国でも出雲国に近い「会見郡天万郷」に比定される。この地域は現在の西伯郡南部町（西伯町と会見町の合併）で、東に大山（伯耆大山）を望み、「手間の山」はこの大山とも考えられる。大山は『出雲國風土記』で「火神岳」とも呼ばれ、その山麓にある大神山神社本社は、大穴牟遲神を祭神として祀る。
- (20) 『日本書紀』の素戔鳴尊による八俣大蛇退治の一書（第五）に、素戔鳴尊が体毛を抜いて木に変え、またその三人の子もまた木の種子を播いたために、三柱の神々が紀伊国に祀られている、という記述がある。
- (21) 難題を課されて若者がそれを乗り越えて成長し結婚に至るという話は、モーツアルトの『魔笛（魔法の笛）』でも、王子タミーノと恋人バーミーナが神官ザラストロの試練を乗り越えて結ばれるという物語になつてゐる。
- (22) 『先代旧事本紀』では「高志の沼河姫」。新潟県糸魚川市に奴奈川神社があり、その祭神が沼河比売である。
- (23) 『出雲國風土記』によると、「須久奈比古命」すなわち少名毘古那神は「大穴持命」すなわち大国主神とともに「飯石郡」（現在の雲南省西部から飯南町にかけての地域）に「稻種」を蒔いたとされる。前掲書、七七頁を参照。また『日本書紀』では、少彦名命が「栗島」で栗の

茎に彈かれて常世国に行つたとされている。美保岬に近い栗島神社（鳥取県米子市彦名町）は、その伝承から少彦名命を祭神とする。

- (24) 三輪山と大物主神との関係については、『古事記』の次の物語でも示されている。崇神天皇の治世下で疫病が流行つていたところ、天皇の夢に大物主神が現れて、「意富多多泥古おほたなねに自分を祀らせれば祟りは消えよう」と告げた。そこで大物主神の子孫と名乗る意富多多泥古を河内を探し当て、これを神主として三輪山に大物主神を祀つたところ、疫病が終息したという。

- (25) 出雲で信仰されてきた龍蛇神は、対馬海流に乗つて出雲沖に出没する海蛇のセグロウミヘビに基づいていると考えられる。この海蛇の特徴は、背中が黒であるに対して腹が黄色で、海を照らして大国主神のもとへ来た神のイメージと重なる。

- (26) 出雲大社の大宮司であつた千家尊福せいけが明治十五年に創設した教団で、教派神道十三派のうちの一派をなす。教祖は初代出雲国造の天穗日命とされる。

(27) この大祭は、旧暦十月の神在月に出雲大社本殿で行われる神在祭に統いて、出雲大社教の龍蛇神講によつて神楽殿で行われる。

- (28) 宝賀寿男によれば、三輪族は博多湾沿岸部を故地とし、二世紀前半頃に大物主神を中心にして出雲から三輪山西麓に移遷してきた海神族の一派とされる。『三輪氏・大物主神の祭祀者』青垣出版、二〇一五年、一八六頁を参照。

- (29) 建御雷神は大和朝廷で祭祀を司る藤原（中臣）氏の祖神であり、藤原不比等がこの神を祀る鹿島神宮から勧請して春日大社の祭神とした。ちなみに藤原不比等は『日本書紀』の編纂にも参画している。

(30) 『日本書紀』では、派遣されたのは経津主神ふねののみと武甕槌神たけみつづらのかみとされている。

- (31) 『古事記』によれば、事代主神は大国主神と神屋櫛比売命の子とされ、美保岬に建つ美保神社の祭神である。

- (32) 七世紀末の藤原京跡から出土した木簡に「科野國」の文字が見られ、すでにこの時期には令制国「科野國」が成立していたことが分かる。

- (33) 建御名方神のこの物語は『古事記』と『先代旧事本紀』（続日本古典全集、現代思潮社、昭和五五年、六〇〇頁）に見られるが、『日本書紀』や『出雲國風土記』には見られない。

- (34) 『出雲國風土記』に大国主神による出雲國譲りの物語はなく、「大神〔大国主神〕の宮〔杵築大社〕奉へまつらむとして、諸の皇神等宮處に參り集いて杵築きづきたまいき」（前掲書、五六頁）となつてゐる。

- (35) 新谷尚紀『神社の起源と歴史』吉川弘文館、二〇二一年、七四頁を参照。
- (36) 現在では斐伊川は宍道湖に注いでいるが、これはもともと杵築大社の南側を流れて西の日本海へ注いでいた斐伊川の流れを、洪水被害<sup>10</sup>を避けるために江戸時代に水路を北東の宍道湖へと導いたことによる。
- (37) 森田喜久男は、多芸志小浜の位置について、「タギシ」は屈曲を意味していることから、「古代の斐伊川が大きく西に蛇行する河岸」に望む「現在の出雲市武志町一帯」を想定している。『古代王権と出雲』同成社、二〇一四年、四七頁。
- (38) 前掲書、二〇八頁。
- (39) 出雲の東部と西部における勢力の分立については、「東西出雲の二大勢力」として指摘されている。森田喜久男の前掲書、一二二頁以下を参照。
- (40) 安本美典は荒神谷遺跡の銅劍や加茂岩倉遺跡の銅鐸が、同位対比の測定値から、北中国原産の銅を主成分にして一八〇～二六〇年の間に製作されたこと、その年代が邪馬台国時代すなわち三世紀前半と重なることを実証している。そしてそれらがその後に埋納されたという考古学的事実から、出雲を根拠地としていた大国主神による「出雲の國譲り」を想定している。『衝撃の古代出雲』産能大学出版部、平成九年、一〇四頁以下を参照。
- (41) 新谷尚紀『伊勢神宮と出雲大社』講談社学術文庫、二〇二〇年、一三五頁以下を参照。
- (42) 北部九州に位置する須玖岡本遺跡（福岡県春日市岡本）は弥生時代中期の奴国<sup>11</sup>の遺跡で、青銅器の鋳造跡が発掘されている。
- (43) 新谷尚紀『神社の起源と歴史』吉川弘文館、二〇二一年、八一頁を参照。『魏志』倭人伝には、景初二年に倭の女王（卑弥呼）が魏に使者を派遣して天子に献上品を届けたこと、それに対し魏王が見返りとして「親魏倭王卑弥呼」に「銅鏡百枚」などの下賜品を与えたとする記述がある。「銅鏡」の種類は記されていないが、その中に神原神社古墳から出土した「景初二年」銘の三角縁神獸鏡が含まれていたと考えることができる。このことは『出雲國風土記』の「大原郡」の条に、「神原郷」を「大神〔大国主神〕の御財<sup>12</sup>を積み置き給いし処なり」（前掲書、二九〇頁）あることと符合する。
- (44) 最大規模の三号墓からは被葬者の副葬品として鉄劍などが出土しており、銅劍文化から鉄劍文化への転換が示されている。

- (45) 『日本書紀』「一書（第二）」には、武甕槌神とともに派遣された経津主神による出雲の神々の平定物語として、次の記述がある。「従わない者があると斬り殺した。帰順する者には褒美を与えた。この時に帰順した首長は、大物主神と事代主神である」。
- (46) 大和朝廷から出雲守として忌部子人が着任したのは七一〇年のことである。
- (47) 『先代旧事本紀』では、崇神天皇の時代に天穗日命の十一世孫の宇迦都久怒が国造になつたとされている。
- (48) 『日本書紀』の中では、天穗日命が大国主神の宮居で祭祀を司ることになつたとされる。そうした神話の背景には、もともと熊野大社を奉斎していた意宇郡の出雲国造家が、出雲郡の杵築大社の祭祀をも司るようになつたという史実がある。
- (49) 鎌田純一は建御名方神が信濃國に至つたルートについて、新潟県の糸魚川から川伝いに信濃へ入つたと推定している。上田正昭・鎌田純一『日本の神々「先代旧事本紀」の復権』大和書房、二〇〇四年、一四一頁。
- (50) 『先代旧事本紀』には、大国主神が高志沼河姫を娶つて生まれた子を建御名方神とする記述がある。上田・鎌田『日本の神々「先代旧事本紀」の復権』大和書房、二〇〇四年、一四一頁を参照。
- (51) 前掲書、一二二頁を参照。御穗須々美命は能登半島の先端（珠州市）にある須須神社の祭神として祀られている。
- (52) この遺跡には、姫川などで採取された翡翠原石を加工する工房跡が見られるとともに、そこから姫川沿いの交易路を通つて翡翠勾玉が全国に伝播していくとされる。『糸魚川市史考古編』糸魚川市役所編、一九八六年を参照。
- (53) 大林太良「聖空間の構成原理－文化人類学の視点から」『御柱祭と諏訪大社』筑摩書房、一九八七年、一一九頁。
- (54) 諏訪大社のそれぞれの宮に立つ御柱は、八ヶ岳山麓の樹林に対する縄文時代以来の神木信仰を留めている。
- (55) 宮坂光昭「強大なる神の国－諏訪信仰の特質」『御柱祭と諏訪大社』筑摩書房、一九八七年所収を参照。
- (56) 宮坂光昭の前掲書、四〇頁を参照。
- (57) 大伴家持が因幡国府に赴任したのは七五八年で、その後も淡海三船や公卿レヴェルの要人が赴任している。